



海へ 来た。

黒野 ている

海

缶詰になる予定だった明日の、書類製作が遅れてもう1日伸ばしになった。

なにもかもスケジュールをいれずにいたから
ぽっかりと空いてしまった1日。

朝から時間がとれるのなら
あいつと海が見えるところまで
行ってみようか・・・

遅い時間だったが あいつにメールを飛ばす。
30分待ってもなかなかレスがない。

「しかたないな」

通話するのは久しぶりだ。
何回かのコールの後、あいつが出た。

『ああああ～はいはいはいはいお世話になっておりますー！！』

あきらかに狼狽している？

「あ かけちゃマズかった？メール送ったから、あとでレス頂戴」
『は、は、はい～。かしこまりましたっ！失礼いたしますー！』

言い終わらないうちに 通話は終わる。

あやしい・・・こんな時間に仕事でもないだろう。

大事なお客さんでも？
それとも家でなにかあったのかな？

遠出をするくらいガソリンなら入っている。
天気も心配ないだろう。
明日のドライブのルートをいくつか考えて、知らないうちに気を失う。

着信音で目が覚める・・・朝の5時だ。

『ごめん・・・遅くなっちゃった。ていうか寝てたよね』

枯れた声であいつが喋る。

どうした？こんな時間に とたずねる言葉を呑みこみ

「明日・・・いや 今日一日空いたからさ ドライブに行かないかな～と思って」

全部言い終わらないうちに あいつが

『今から 出られる?』

気になって なにも聞かずに迎えに行くことにした。

呼ばれた場所は自宅ではなく仕事場でもない 繁華街に近い駅。

もうじき始発も出る時間だ。

カラスの群れが飛び立つ。

あいつは約束の場所に かるうじて立っていた。

車を寄せてウィンドウを開ける。

「待たせたね お姫様」

何も言わず 口元だけで笑うあいつ。

「このまま出かけてもいいのかな？」

しばらくして あいつはうなづく。

「眠ってないんだろ？ しばらくかかるから休んでればいいよ」

静かだなと隣を見ると

泣いてる・・・

見なかったふりで 車を走らせる。

高速はまだまだ空いていて

向こうへ着いてから朝のコーヒーを飲めそうだった。

何にもさえぎられない朝日はストレートに
僕たちを照らす。

明日からは仕事でしばらく眠れない日が続くだろう。
ゆっくりできるのは 今日だけ、か。

今日で よかったのかもしれないな。

渋滞の時間を避けるために 海に見えるサービスエリアに入る。
見晴らしのいい場所を選んで車を停める。

「ほら 顔洗っといで」

やつを起こす。
ゆっくり起き上がったあいつは、まぶしそうにあたりを見渡す。

「・・・海だ」

そうです 海に来たんです。

島

そう 海を見たかったんだ。

何かを洗い流すために 海に来たかったんだ。

顔を洗ってきたあいつにコーヒーを渡す。

「ありがとう」

前髪が濡れて、まるで海から上がってきたようだ。

何か食べるか尋ねるが、小さく首を横に振る。

目の前は 広い広い海だ。

ここに全部捨てちまえ。

ゴメン

私が馬鹿なの

仕事でどうしても合わない人がいるの
コスプレの企画で撮影する段取り組めって

上の会社のひとだから
しぶしぶメイドの衣装とか用意して
撮影のスタジオ行って

あれこれ無理難題言うから時間が遅くなって...

ふふ

もう

わかるよね

そういう

嫌が...ら...せ

そこで言葉が涙で滲む

「信じらんねえ」

2度と上がってこられないように
そんな手も使うって聞いてたけど
まさか 私がそうなるなんて

もう
笑っちゃうでしょ

ごめん こんな話で

ホント

ごめんね・・・

見るとはなしに 海に浮かぶいくつかの島と島とを線で結んでいた。

音もなく静かに 海はそこにあった。

季節はずれの海は 広くて静かだよ
波の音も 耳に入らない

どれくらい時間がたったのだろう

「こんなこと 言わないほうがよかった・・・？」
あいつがまだ曇った声を出す。

「聞きたい話じゃないよね。黙ってればよかったね、私が悪いのに。全部私が悪いのに」

「お前が悪いわけじゃないでしょ」

「でも・・・」

何かを呑みこむように 言葉を切る。

「ひとりで行っちゃ いけなかったの」

「もう 考えるな」

なんていうのか

この休日

さて どうしようか。

ガラスに反射する光がまばゆい。

日差しが高くなって 暑くなってきた。

泳ぐか . . .

「いま なんて？」

イグニッションキーをまわす。
エンジンに火が入る。

「泳ごう カレン」

高速道路の まだ車の多い本線にむりやりねじ込むと
冷え切ったエンジンは まだ荒い音を立てるけど
もうそれも BGMになるほど なんだか海が呼んでるような気がした。

シーズンオフの海でよかった。
これ 山ならガケから心中しそうだな・・・

「およぐって いったの? マジで?」

そうですけど なにか。

「秋・・・だよ? てか 水着とか ちょっと まって?」

黙ってる。

「ねえ・・・へんなこと 考えてない□」

黙ってる。

「もしかして 怖いこと考えてる?」

ノーコメントのまま 左からミニバンを抜く。

「このさき オービスありって」

聞かない。

「ねえ なんで何もいわないのー？怒ってるの？・・・謝るから もう許して」

オービス直前でスピードを落とす。

「おこってないって」

ショックをショックで洗い流すのも

一つの手だけど

「なんか 天気いいから 早く泳ぎたいなあーって」

隣で真っ青になってるから そこまでしておく。

カーブで車の向きが変わると空は雲の波に吞まれる。
日差しは強くても、やはり秋の雲だ。

ホントに 泳ぐかどうか？

そんなこと わかるものか。

灯台

空が青さをとり戻す。

大きく左に曲がるしなやかなカーブを過ぎると
目的のインターチェンジだ。

高速をおりて窓をあけると 潮の香りで満ちあふれる。

「ああ 海の匂いがする・・・」
香りが感じられれば もう大丈夫だ。

海水浴場を通り越して漁港から少し離れた堤防まで
空と 風と 鳥しかない風景。

突堤の先には 小さな灯台が。

そこに車を停める。

泳ぐような場所ではないので 少しはホッとしたのだろう。

「降りて いい？」

カレンはそう言うと もうドアを大きく開けていた。

新しい風と光が車の中にも満ちる。

「さあ どうしようか」

どちらからともなく そう言う。

突堤の先まで歩こう。

僕のさした指の先には白い灯台が。

カレンは だまって後をついてきた。

「私 仕事やめよっかなあ」
ぽつり と もれる言葉。

それを聞いているように 海も風も 凪いでいる。
今やめたら 屈することにならないか？ とはいえず・・・

「前からどうしてもこの仕事したくって」
卒業文集にも そう書いてた気がする
あれは 中学校だったか 高校だったのか・・・

「仕事は楽しいし 刺激的だし、自分に合ってるって
だから どんなことがあっても つらいなんて思ったことなかった」
留学から帰ってきたときも、そんなこと言ってた。

「がんばれば 男女の差なんて ないと思ってた。
体力の差とか、能力の差とかならわかるけど」
無理してたんだろうな・・・

「がんばってきたつもりだけど、何のがんばりにもなってなかったみたい。
仲良しごっこできるとは思ってないよ。

でもさ こん・・・」

言葉と 足が 同時に止まる。

目を大きく開いたまま

はじき出される大粒の涙が

潮の浮いたコンクリートに 落ちては消える。

・・・しかたないな
あと少しで 灯台なのに。

「お嬢さん、そんなところで泣いてたら海へダイビングしそうだから！」
と 灯台から呼ぶ

「ここまでおいで！」

それは 一直線に
僕のところまで駆けてきて・・・

目の前が 真っ暗になった。
激しい衝撃と しびれた頭・・・
まるで ブレーキの壊れた車だな。

「・・・止まれよ ゴールで」

やっとかすれて出た声で 「馬鹿だな」と 笑ってやる。
思い通り また 肩が震えだす。

泣くときは 身体中で泣け。

疲れ果てるまで 泣け。

今日は 泳ぐのは免除してやる。

体温の上がった カレンの身体を
午後からの潮風が 優しくなでる。
海の色が青から碧に変わる。

「あたし こんなことがなかったら、ショウに いたいことがあった」
波の音が はじめて聞こえた。

「なに？」

「ゴメン 言おうと思ったけど・・・もう」

「言えよ 気になる」

「いいの ありがとう。ホントに ありがとう、ごめんお休みだったのに。台無しにしちゃったね」

まだむくんだ目で笑おうとする。

「無理するな」

「きめた！ 仕事やめる！ なにもかも やめ・・・」

「カレン。まだ逃げるな。お前はまだ やるべきことがあるんだ」

「何を」

「お前 そいつに勝ってこい」

「・・・なに いったるの？」

「なんでもいいから 勝ってこい！」

「どうしろと」

「やめるのなんか その後だ。応援してやるから 戦え」

「あたしに 何ができるって・・・つぶされて終わるだけじゃん・・・」

「つぶされるまで 戦え。どうせ やめるんだろ？」

「これ以上 つらくさせないでよ・・・」

「わかってる」

「わかってないよ！」

カレンの言葉に力がこもる。

「あたしの気持ちなんて、ぜんっぜん わかってないよ！

じゃあ・・・ショウに彼女がいてさ。こんなことになったら、おなじこと 言える？」

「言う」

「へっ？」

「だって 弱いオンナ きらいだもん」

「なんだあ？」

「殴られたら 殴り返してこいよ」

電光石火で・・・

やっぱり 殴られた・・・

不意打ちだったので 僕は大きくバランスを崩す。

「あたしに もっと傷つけて？ひどい。こんなことショウにしか言えないのに」
カレンはもう 泣いていなかった。

「だから」

「だから なによ」

泣くどころか・・・

「お前にしか言えないこと言ってる」

「どういうことよ」

「カレンみたいに強いオンナ好きだから」

「とってつけたようなこといわないでよ。また殴られたいの？」

カレンはスッと手を伸ばした。

思わずそれをよける。

その手は 僕のほうに向けて止まった。

「なに この手？」

「キー！車の！」

ポケットから出したキーをカレンに差し出す。

キーをもぎ取ると僕をにらみつけて、カレンは歩き出した。

影が長くなった。そろそろ陽がオレンジに傾く。

「あたしは 一人で帰るから」

カレンが振り返って 言う。

「ショウは歩いて帰ってらっしゃい！」

馬鹿な・・・ここから家までは60kmある。線路もない 人影もない海岸線だ。

僕はカレンが歩いていく後を静かに目で追った。

風はいちだんと強く、カレンの涙を吸った髪を吹きさらす。

そんなにしっかりとした足取りで歩けるのなら
僕は必要ないのかもしれないな・・・と ひとり笑う。

灯台にはいつしか灯がともり、光の矢が 飛ぶ鳥をいさめる。

空の彩りが刻々と変わっていく。

そういえば朝からなにも食べてないことを思い出す。

あいつに 生きていく道があるなら

僕はいなくても いいのかもしれないな。

ふりむくと海は夕焼けを呑み込んで、明日へと移動を続ける。

波のきらめきが ひとつ ひとつ 消えてゆく・・・

黙ってても明日は来る。

いままでもそうだったし、これからも だ。

暗く重くなった海風を受けながら、僕は突堤の上を歩きだす。

・・・と 携帯が鳴る。

あいつだ。

『ちょっと はやく来てよ・・・』

「来てって、どこにいるの？」

『そんなの・・・車にきまってんじゃん』

「車って」

『ああ、もう！ここにいるから！』

「え？帰ったんじゃないの？」

さっきキーを渡したのに。
もうあれからかなり経ったはずだった。

『・・・動かし方 わかんない』

ああ あいつ・・・

暗闇をおそろおそろ歩いていた足が やがて走り出す。

まだ あいつの声は続いていたが

それよりも・・・

僕の行く先には 黒い闇となった海を照らすための月が

冷え切った車と、また泣き出しそうなあいつを青く照らしていた。

- fin -